

ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。そして、神殿の境内で牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを御覧になった。イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出した。-ヨハネ2章-

## キリストへの愛に生きる人

いつか新聞の投書欄に、妻に逃げられた夫の記事を見ました。その父親は、五年生の息子と一年間過ごしましたがある日、息子の首に手をかけたのです。何一つ抵抗せず、苦しい中で子どもが発した一言「ボク、世界中でお父ちゃんが一番大好きだよ」に、父親は思わず手を離し「それからの私の命、この息子に生かしてもらっています」という投書でした。信仰者ではないこの父親の投書に真理があると思いました。「命を懸けて、私を大切にしてくれた」という体験をしたら、人はその人を決して裏切ることが出来ない人になるといいます。

イエスは、多くの人を癒し言いふらさないように戒めましたが、癒された人はかえって、その人を伝え讃える人になりました。それは、その人の一部始終を愛するようになるからでしょう。

こうして「神の十戒」は、救ってくださった、愛する神の「すべて」になる筈でした。神のすべてを愛する人に「自己愛」は存在しません。苦しみはほとんどがすべて、元を正せば、自分を愛するがゆえに生じた禍だからです。

ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人が知恵を探すのは自己愛ですが、キリスト者が「十字架につけられたキリスト」をのべ伝えるのは、愛がすべてに勝利することを知った体験からであり、その体験を妨げる最大の原因は、自己愛なのです

救いの体験をしながら不平不満が神の民を支配したのは、悲しいかな、その喜びが一時しのぎに過ぎず、腑に落ちないで、自己愛がそれ以上に勝っていたということなのでしょう。

イエスが神殿を清める行為は、真の神殿とは、建物ではなく「神が住み、人が神に出会う場」であって、それは私たち一人一人の心を指し、私たちの心の清めを示しているのです。

わたしたちの体は、神から預かったそれぞれのタラントン（神の財産）で建てられた「神の神殿」です。人の目には、それぞれ5タラントン、1タラントンに見えても、それは人間の価値観であって、神の財産に価値の比較はなく、みんな等しい1ムナです。大切なことは、私たちの本当の仕事は、預かったタラントンで「神に仕え、神を賛美する」ことであって、仮にも、それをもって人と比較し、品評会よろしく優劣を競って一喜一憂する、すなわち父の家を商売の家にするということではないのです。そのような神殿はつぶしてしまうべきです。つまり、私たちが、自己愛に死んで三日目に立て直すキリストへの愛に生きる人になるよう、今日の福音で主は招いてくださっておられるのです。

